

2014年9月28日  
(9月29日一部改訂)

### 御嶽火山 2014年9月27日噴火で発生した火砕流

中部地方整備局の滝越カメラで撮影された火砕流は以下の特徴を持つ。

- 1) 火砕物密度流は2箇所（地獄谷と剣ヶ峰西）で発生した。
- 2) 地獄谷を流れた火砕流の流下速度は時速30kmを超える。
- 3) 火砕流停止後に先端部からは顕著な二次噴煙が上昇した。このことは内部に十分な熱を持つ流れであったことを示唆しており、粗粒火砕物分離後に灰雲が浮力で上昇したものと理解できる。

エネルギーコーンによるモデル計算では、以下のことが指摘できる。

- 1) 地獄谷からの火砕流の噴煙柱崩壊高度は、200m前後と予想される（図1）。400mを超えると谷外の尾根に火砕流が溢れ得る。
- 2) 剣ヶ峰西からの火砕流の噴煙柱崩壊高度も200m前後とすると、火砕流は北西山腹の尺ナンド沢も下り得る（図2）。
- 3) 噴火火口列が東に拡大し王滝頂上南の斜面で開口し、噴煙柱崩壊高度200m前後で火砕流を発生させた場合には、東山腹の複数の登山道を含む広範囲が被災する恐れがある（図3）。

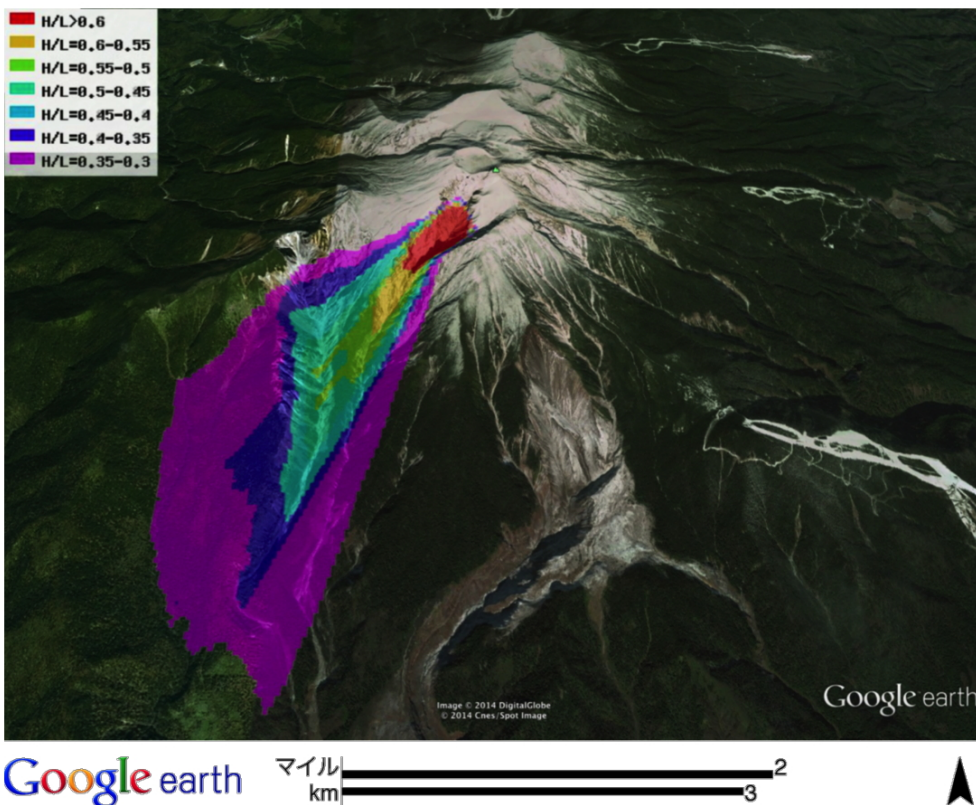


図1 地獄谷標高2700m付近を火口としたモデル計算  
噴煙柱崩壊高度は200m。火砕流の見かけ摩擦係数は0.5程度で分布と合う。矢印は北

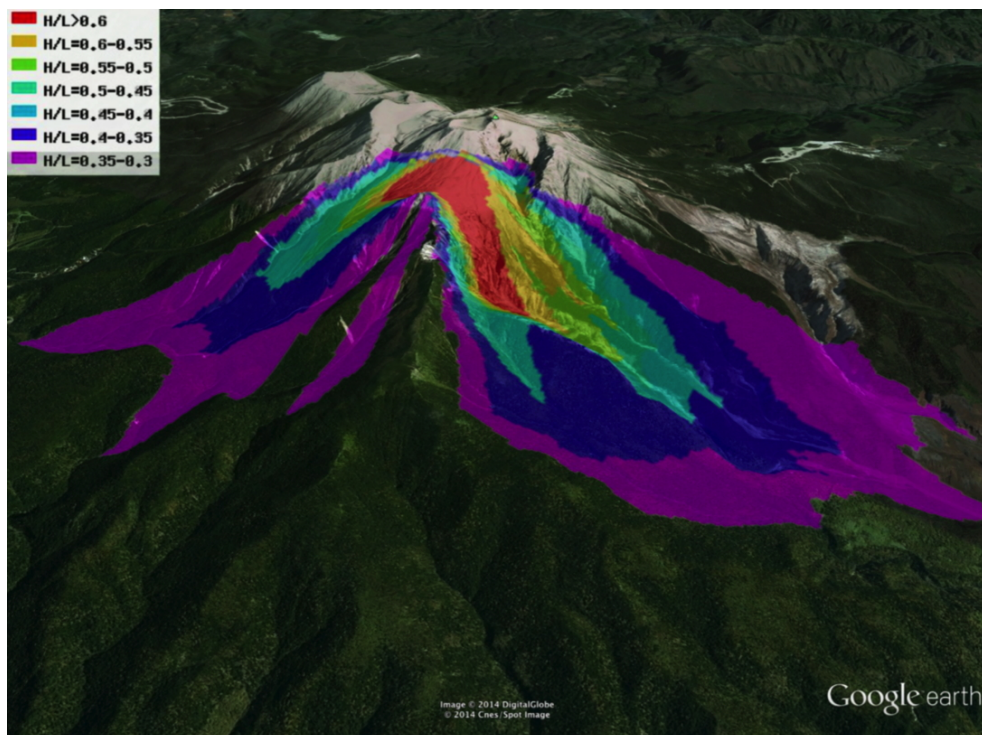


図2 剣ヶ峰西標高 2800m 付近を火口としたモデル計算  
噴煙柱崩壊高度は 200m. 南に下った火砕流の見かけ摩擦係数は 0.55 程度で分布と合う. 矢印は北

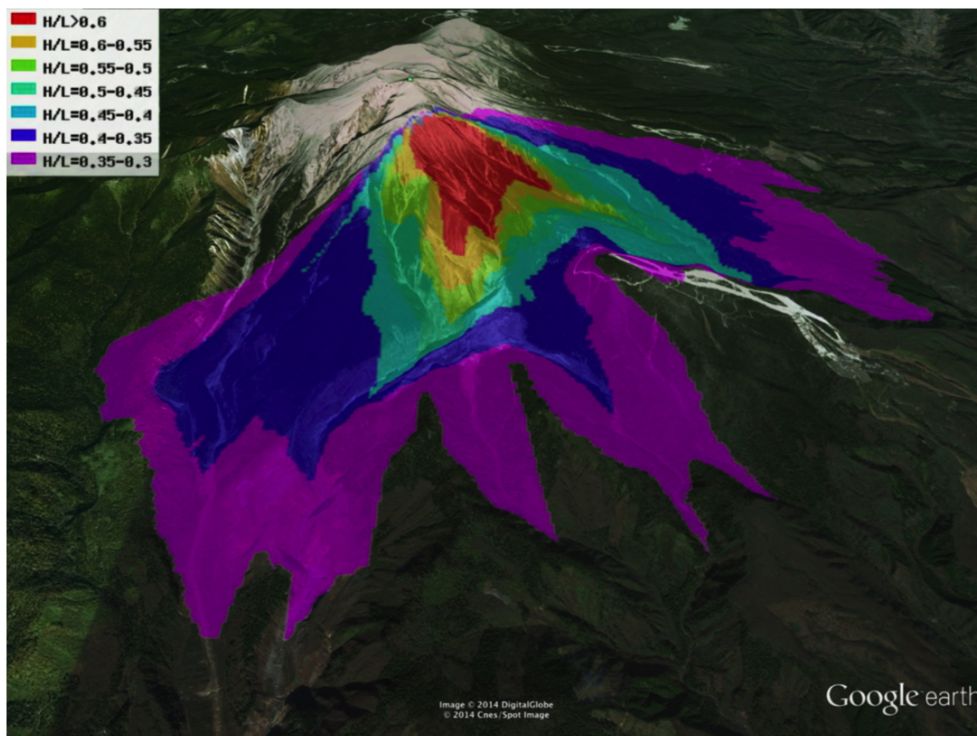


図3 王滝山頂南標高 2800m 付近を火口としたモデル計算  
噴煙柱崩壊高度は 200m. 矢印は北